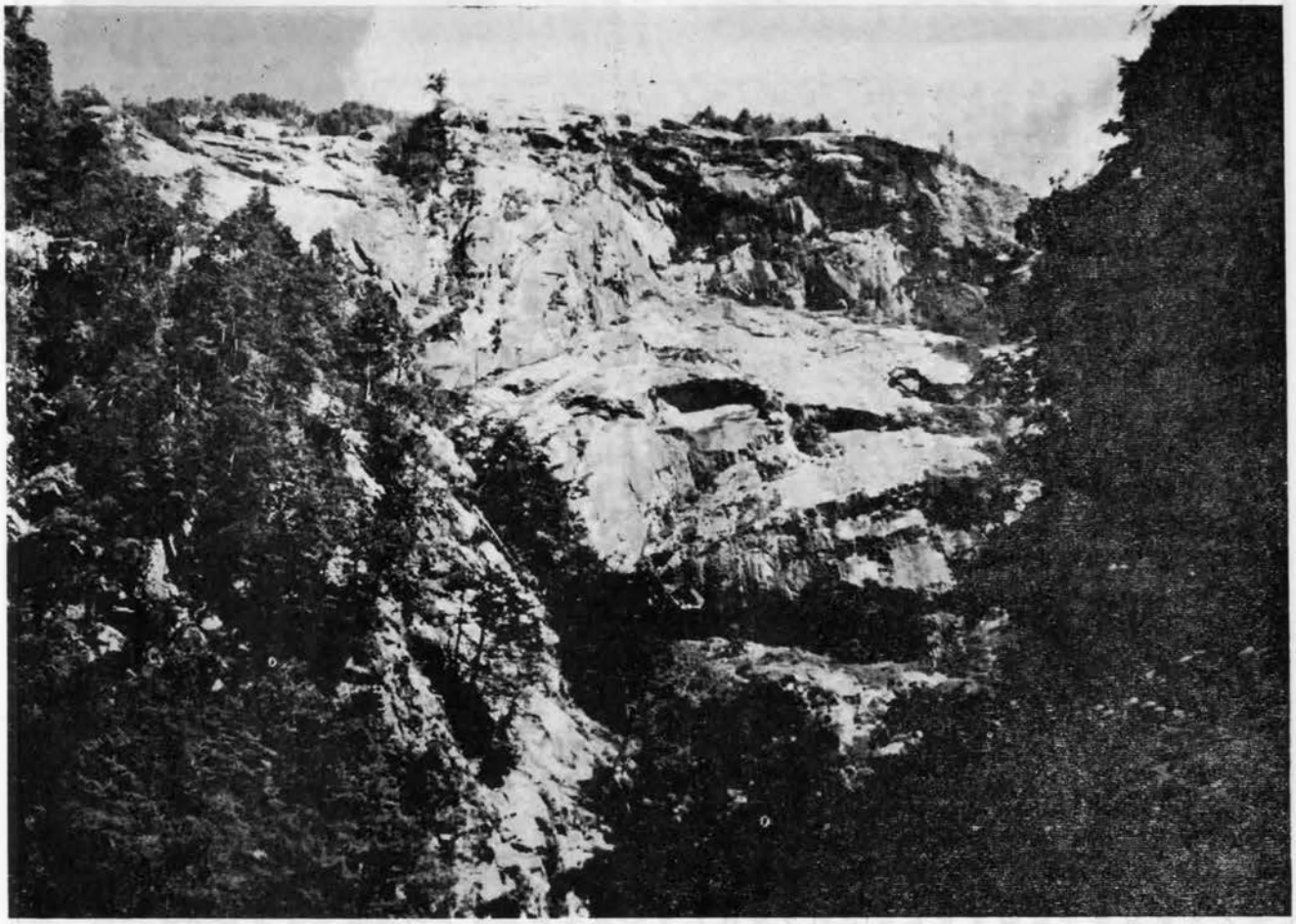
① 毎月1回 25日発行　　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第12巻　第8号　1967年8月25日　大町山岳博物館



地方博物館の使命

近年、各地に博物館施設が設立されつゝある。戦前にはみられなかった現象である。長野県下で現在、二十になんなんとする館園がありそれぞれ独自の立地条件と異った環境のもとに活動を行なっている。

博物館は東京、大阪などの大都会、いわゆる中央の博物館と県下のような地方のものとにわけられ、自ずから経営の規模が異り、その使命が異る。

地方博物館はいうまでもなくその地域との結びつきが強い。その度合の如何がまた、使命の達成の成否にかゝってくる。公立の場合は特に学校教育の補助機関的役割が強く、社会科学習の面などで利用される度合いが強い。

地方博物館の場合は従来、兎角、骨とう品の展覧場の観が強く、深く調査、研究に根差した学問的な背骨が一本通っている館園は従来殆んど無かった。最近は学芸員が充実し、協議会等の諮問助言機関がおかれる向が増えて展示、収蔵資料に生彩を放つ博物館が増えつゝある。

下は小中学生から、上は一般人、大学生、または先生まで幅広い階層と年令の人々を満足させ、地方文化の向上に資するということは至難事である。

地方博物館にあっては、その内容は地方色が強いことが望ましく、人文、自然両面の文化財を保護し、地方では容易に観られない逸品の展覧も時には行ない、講習、講演会等、適宜実施し地方人士の教養と啓発に資することを行ないたい。その他、その館園をめぐる環境に応じて独創的な事業を行ない、博物館法の精神に則った仕事が実施できる筈である。一にその館を運営する館長と学芸員、その他職員の熱意と手腕にかゝるといゝたいところである。

近年、一部門を専門とする地方博物館に対しても、地元の要望や観光客等の期待するところは各部門を備えた綜合博物館であることであり、地方博物館へ行けばその地方の人文、自然を綜覧し得るような施設が完備していることが望ましいのではなかろうか。

（田中 磐・松本市立博物館長）

スピッツベルゲンの旅 (2)

…スピッツベルゲンの歴史…

太田昌秀

ヌナクッツ　ヒクレバス

私が二人のノルウェー人の助手と住みついたところは、西スピッツベルゲン島北西端のスメーレンブルグフィヨルドというところでした。沖合には、アムステルダム島とデンマーク島という二つの島があって、北西からの強い風をさえぎってくれるので、割合静かな所でした。これらの島の名前からもわかるように、この地域は、オランダやデンマークに縁の深い所です。二つの島の海岸には、あちこちに二〜三世紀前の漁場の遺跡やお墓が散在しています。私達のキャンプから三〇㎞ほど南にもう一つの班があって、そこには海洋微生物学者と考古学者が住んでいました。考古学者は六十八才にもなった博物館の館長さんで、漁場の遺跡やその頃の沈没船などを調査にきていました。私は四〜五日この人達と一緒にすごし、いろいろこの島の昔話を聞かせてもらいましたので、それをお知らせしましょう。

今から約千年位前、スカンジナビア地方にはノルマンと呼ばれる勇敢な民族が住んでいて、さかんにヨーロッパを荒しまわり、ロンドンやパリも占領され、人々は彼等をバイキングと呼んで怖れていました。バイキングは立派な船を持っていて大洋をのりこえ、アイスランドやグリーンランドにも移住し、そのうちのある者達は、北アメリカ大陸を発見しています。コロンブスよりも五〇〇年も前の話です。その頃の古い物語は、アイスランドに語り伝えられており、それによると、バイキングは一一九四年にスピッツベルゲン島を見つけていて、スヴァルバルドと呼んでおりました。その後、バイキングは急に衰え、十二世紀以後この島の存在はヨーロッパの人々から忘れられてしまいました。

一四九二年コロンブスがアメリカを見つけて以来、ヨーロッパは大発見時代に入り、その影響をうけて、一五九六年にはオランダの船長バレンツが二隻の船で北極海をまわって中国へ行く最短航路を見つけようと北へ航海をはじめました。ノルウェーの西を数日北上して、荒海の中に小さい島を見つけ、何人かが上陸してみましたが、そのうちの一人が白熊に襲われて殺されました。そこでこの島は〝熊の島〟と名づけられました。更に霧と嵐の中を八日北に進んだとき、彼らはいくつかの小さい島影の間に来ていました。晴れ上ってみると、深いフィヨルドの奥に氷に包まれた陸地があって、氷にけずられた鋭い峯が鋸の歯のように並んでいました。そこでこの陸地は〝スピッツベルゲン＝尖った山々〟と名づけられました。この時以来、ヨーロッパ人の間で、この島はスピッツベルゲンとして知られるようになりました。私達のキャンプした場所は、丁度このバレンツ船長達がはじめにたどりついた所でした。バレンツ船長はこのとき付近の海に沢山の鯨とセイウチが泳いでいるのを見ました。それを聞いて、オランダとイギリスの漁師が競争で捕鯨をはじめ、アムステルダム島にはオランダ人の町ができたということです。今でもアムステルダム島の海岸には、アスファルトで固めた直径六〜七㎜もある大釜をすえたあとがあって、昔こゝで鯨の油をとった頃の盛況がしのばれます付近の苔をはがして数㎝泥を掘ると、当時の人々のさまざまな遺物が見つかります。靴の裏、厚手の布でつくったズボンの端切れ、ガラスの酒盃の破片、こわれた白いパイプなどがでてきました。テントに戻ってから、おじいさんの考古学者は、ゆっくりとパイプをふかしながらこれらの出土品をていねいにスケッチし、永い時間かゝってこわれた酒盃とパイプをつなぎ合せて、立派に複原して見せてくれました。

ライチョウ

このおじいさんの班には、潜水夫が四人いて、島々の間の海峡などにもぐって、海底の生物を調べたり、海底にある昔の遺跡を調べたりしていました。昔話によるとこのあたりでは昔オランダとイギリスの漁師達が漁場争いの大海戦をしたといわれているので、その時の沈没船をさがすのが仕事の一つでした。

盛況であった捕鯨も十八世紀の中頃にはもう鯨をとりつくしてすっかり衰え、その後は主にロシア人とノルウェー人の狩人がやってきて、北極狐、セイチウ、アザラシ、白熊などをわなでとりはじめました。今でもその頃の越冬小屋が島のあちこちにのこっています

越冬といえば、一六三〇年にイギリス船員がはじめてこの島で冬をすごし、その後イギリスはこの島に植民地を作ろうとして移住希望者をつのりましたが応ずるものがなく、そこで罪人達をこの島に送って、一冬越せば無罪にしてやると約束しました。しかし冬がせ

まってきて、最后の船が島を離れようとした時には、死刑囚までがこんな怖ろしい島に残されるよりは、本国へ帰ってもっとましなところで死にたいと願ったということです。

そんなわけで、イギリスは植民地づくりに失敗し、結局この島に定住した人はなかったのですが、十九世紀になって北極探険が盛んになると、スピッツベルゲンも次第に科学的に見られるようになり、北欧諸国から定期的な探険隊が送られるようになりました。第一次大戦后、この島は正式にノルウェー領になりましたので、ノルウェーは国立の極地研究所をつくって定期的な調査をはじめ、炭坑を開発したりしています。前にものべたようにヨーロッパの他の国々では、この島のことをスピッツベルゲンと呼んでいますが、ノルウェー人は今はスヴァルバルドと呼んで、自分達の勇敢であった祖先のことを誇りにしています。

(北海道大学地鉱教室・理博)

氷河の末端

ジネズミのキャラバン

宮尾嶽雄

ジネズミ (Crocidura dsinezumi) というのを、食虫目、トガリネズミ科、ジネズミ亜科に属し、トガリネズミ類(本誌十一巻六号参照)とともに、最も小型の哺乳類の一種である。体重は成体で六〜十グラム、平均八グラム、頭胴長は七十五ミリにすぎない。

本州・四国・九州・佐渡島・隠岐・屋久島・種子島などに広く分布しているが、個体数はあまり多くないようで、一般の人の目に触れることは少ないかもしれない。平地や低山の雑木林、草原、畑などにすみ、林床の草かげや樹木の根もとなどにトンネルを作っている。ネズミなどの掘った穴を利用した、農家周辺の石垣の間や堆肥の下に穴を掘って生活していた例もある。非常に小型であること、夜行性であること、個体数があまり多くないらしいことなどのために、この動物の生活については報告が殆んどない。しかし、アフリカだけで百十一種もの多くが記録されていることでわかるように、旧大陸の熱帯地方には、きわめて多くのジネズミ属の種が生活している。日本のジネズミは、旧北区の中南部方に広く分布するタイリクジネズミ (C. rocidurarussula) に近縁のもので、しばしば同種として扱われている。ヨーロッパにおいても、ジネズミ類の生活についての観察記録はきわめて少ない。

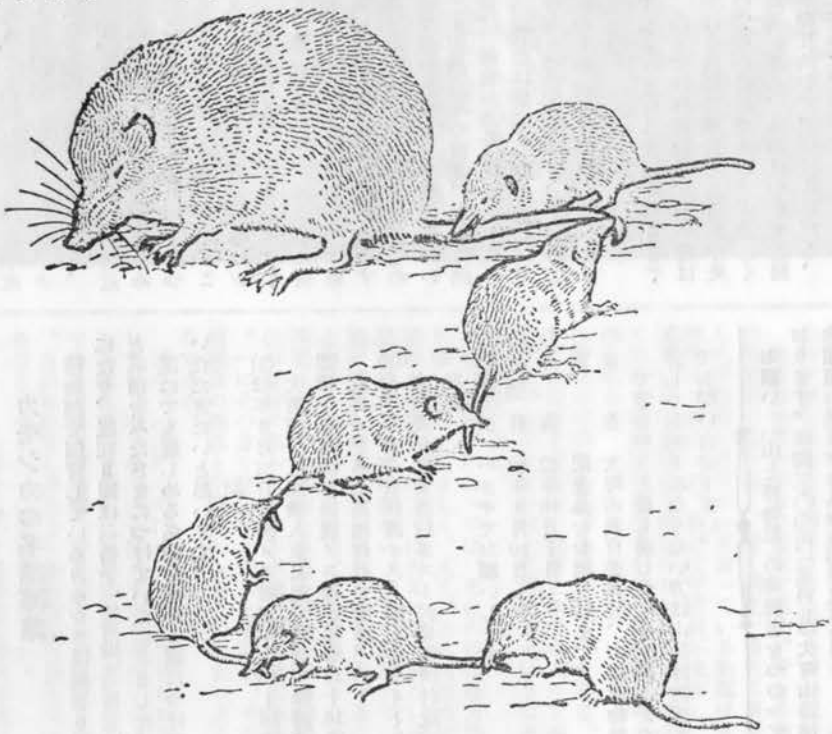
食物は主としてミミズ、クモ、昆虫などで、一日に体重の一・五倍位の重量の餌をとるようである。繁殖期は年一回で、三〜六月、一回に平均四匹の仔を産む。生まれたばかりの赤ん坊は赤裸で眼は閉じている。寿命はトガリネズミと同じく一年半くらいで、春にうまれた仔は、性的には未成熟のまま冬を越し、翌春に繁殖活動を行なって、十月には死にたえるようである。

ジネズミ類で面白いのは、親がその仔を連れ運ぶのに、キャラバン (Caravan) を編成することである。ヨーロッパのシロハラジネズミ (Crocidura leucodon) で観察されているのであるが、危険を感じたときに、仔が小さい間は母親が口にくわえてその仔を運び、安全な場所に移す。しかし、しばらくしてその仔が大きくなると、仔は母親の尾の基部の皮膚を口にくわえ、次の仔は前の仔の尾の根もとをくわえるというふうにして、次々と一列縦隊につながって母親について歩く。これをキャラバン行動と呼んでいる(図参照)

仔は互いにしっかりと前の者の尾をくわえているので、母親をつまみあげると、その仔等も一緒にぶらさがってくる。このキャラバン行動は、その仔が独立生活に入るようになると解消される(生後二十一日位から)。ヤマアラシやイタチのある種にも似た行動がみられるという (Wahlstrom. 1929 : Bauman. 1949 : Zippelius. 1957)

多くの有蹄類で、仔はその母親の後について歩く行動を示し、母親がいないときは、他の種の動物、人間、更には自動車など動くものにならなんにでもついてゆく傾向がウマ、シマウマ、カモシカ類などでみられる。シロハラネズミのキャラバンは、このような行動習性と一連の関係があるのかもしれない。残念ながら日本のジネズミにこのような習性があるか否か、筆者はまだ見たことがないし、記録もない。

(信州大学医学部解剖学教室)



シロハラジネズミのキャラバン(BOURLIERE)より

信州植物寸景

横内斎

（その七）

レンゲショウマ Anemonopsis macrophylla Sieboldet Zuccarini きんぽうげ科

深山の木陰に生える多年草、茎は高さ七、八〇cmにもなる、上部で分枝して花をつける。葉は大形で互生、大体再三出する小葉は卵形、根出葉と下葉は長い柄がある、茎の上部で分枝してまばらな総状花序となり、有梗のかなり大形の淡紫色花をつける、やや下向きで径三・五cmにも及ぶ、すこぶるおもむきがあり美しい、花の頃は、茎高もそういちじるしくないので見ごたえがある。果実は袋果で無毛である、日本特産属であり、属するのは一種なので特産種でもある、本州の福島県から奈良県の間に分布する、信州では、戸隠高原、東筑摩郡四賀村天山、南安曇郡奈川村、下伊那郡旧且開村、諏訪郡八ヶ岳の西岳や編笠山中、富士見町横岳峠、上伊那長谷村、南アルプス仙丈岳の南の尾根、南北佐久郡の東部県境上などに産する。フォッサマグナ地帯に二分化したか、あるいはこの地帯に入って残され分布を広げたかのいずれかであろうといわれている、もし前者の場合とすれば、両佐久の県境上が、その中心ではないかと想像される、それはこのあたりの山地には、これが多産するからである。

ミサヤマチャヒキ Helictotrichon Hideoi Makino いね科　山地に生える多年草、地下茎がある。稈は高さ七〇～八〇cmに達する、葉は長さ五～二〇cm、鞘に毛がある、花は七月頃円錐は花序はぬき出し、長さ六～九cm、上部は点頭する、小穂、帯紫黄緑色、二～三個の花がある。この類では美しい。諏訪の御射山で小泉秀雄氏の発見、八ヶ岳西側から釜無山脈に入り山梨県に分布、近頃伊豆半島の一部にみられるという、西は岡谷から筑摩山脈の西側を猿ヶ番場峠まで分布している、東筑本郷村三射山区付近には多産する、これもフォッサマグナ地帯の要素で同帯を中心として分布している、本州特産の属であり、従って特産種である。その分化の中心は本郷村三射山ではないかと想像される、まだ発生后年がたたない種で分布は幼弱であると考えられる。

続菅平高原の注意すべき植物、私は本誌第十二巻第六号に、菅平高原の注意すべき植物の小題のもとに、同高原の特徴ある植物につき数種を解説したが、その后の調査が進むにつれて、興味のある事実を見出したので、その二、三を紹介したい。

菅平高原の中央よりは、少し西乃至南によった所に神川(後に千曲川に合流)の源流がある。ここは巾は一〇～二〇〇m程で、長さは四km以上にも及ぶかと思われる長い谷地（やち）になっている。左右から湧水があるので水が相当豊富に流れている。火山灰土の泥地などの両岸付近は陰湿をきわめ、それにヤチグモとハンノキの丈の高い密林となっており、中層はあまたの灌木にてうっぺいされ、下草はこれも一m近いオニナルコスゲが、すき間もなく生えているので、それこそ「昼なお暗い」という感じで、従っておとずれる人もないわけで、この密林は千古の秘密を保って今日に来た、しかし何が幸いになるか知れないもので、今年は六月から七月にかけて雨が少く八月も同じで、この高原もそれをまぬがれる事はできなく、この異状晴天は、菅平産の高原野菜にも相当影響して、ニンジン、カンラン、レタスなど瀕死の状になって来た、そこで栽培農家で、この川の両岸に比較的近い人々は灌漑施設をして人工灌水をするために、所どころにこの谷地に入る切り開きをつけた、そのため部分的ではあるが、私はここに前后四回に入りこんだ、七月行った時はシキンカラマツ Thalictrum Rochebrunianum Franchet et Savatier が美しく咲いていた。本種はきんぽうげ科に属し、本県北部と群馬、福島両県のこれも北部に特産する種で、茎は高さ一m内外、直立した無毛の多年草で、上部で枝分れする。下葉は短かい葉柄があり、三～四回三本の複葉、小葉は倒卵形～広倒卵形°三鈍歯がある、花は七～八月開き、円錐花序で花色は紫。すこぶる美しい。

これは八月中旬まで咲きつづき、下旬になると日陰の遅咲のものの外は結実してしまう

クロビイタヤ Acer Miyabei Maximowicz　かえで科　高木で枝は灰白色、若い時は短毛がある、葉は五角形で掌状であるが中央が延びているので形が特異である。両面とくに脈上に開出短毛がある、基部は心形で五裂する。裂片は倒卵五角形で、尾状に延びる、柄はなかなかに長い、花序は短かい柄の上に円錐状散房花序につく、分果は密によごれた黄色の毛がある、翅は水平に開出する、これの変形がシバタカエデであるが、おそらくこれはいろいろの程度があって続くと思う、これがとれた、信州では変形シバタカエデのみと思っていたのに、これは嬉しい事であった、シバタカエデ中に混生する、しかし大井博士は同一種としてクロビイタヤのなかに包含している。

× × ×

カモシカの名前募集

博物館で飼育しているカモシカは現在6頭になり、現在3頭は「岳子」「大助」「岳三」と名前をみなさまにつけていただきました。誰にでも親しめる名前をあと3頭につけていただきたいと思います。

記

(1) 42年3月21日保護メス推定年令15～16才　大町市平区高瀬入東葛温泉付近で保護。

(2) 42年6月29日保護メス推定年令15～16才　北アルプス上高地付近で保護。

(3) 42年8月7日保護オス、推定年令4～5才南安曇郡安曇村カスミ沢発電所付近で保護。

◎応募方法　ハガキでお願いします。

◎〆切日　42年9月10日

◎発表　42年10月1日

◎賞　記念品をお贈りします。

◎審査　大町市教育委員会、山岳博物館で審査のうえ最も適したものを選びます

◎詳しくお知りになりたい方は山岳博物館までお問い合せ下さい。

お願い　「山と博物館」の購読者をつのっております。年間三〇〇円(送料共)大町山岳博物館宛お送り下さい。(切手は不可)

表紙説明

唐沢岳　幕岩（カラ沢より）

撮影　長沢修介

山と博物館　第12巻第8号
一九六七年八月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL(大町)二二一
大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町
大糸タイムス印刷部
定価　年額　三〇〇円　(送料共)